

氏名(本籍)	やま もと まさし 山 本 齊 (茨城県)		
学位の種類	博 士 (芸術学)		
学位記番号	博 甲 第 4455 号		
学位授与年月日	平成 19 年 3 月 23 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	現代絵画における筆致の研究 - 山田正亮を中心に -		
主 査	筑波大学教授	博士 (芸術学)	岡 崎 昭 夫
副 査	筑波大学教授	博士 (芸術学)	五十殿 利 治
副 査	筑波大学教授		玉 川 信 一
副 査	埼玉大学教授	博士 (芸術学)	小 澤 基 弘

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、油彩画を実際に制作する者として、現代日本の代表的画家の一人である山田正亮とその周辺を取り上げ、それらの作品の色彩と構造を筆致の観点から分析するものであり、一般的な作品論や作家論とは異なる研究である。とくに筆致によって形成されるこれらの絵画の特性について、制作過程や基本的な要素を検証した上で、その具体的な応用事例としての自作の展開に論及する構成となっている。

本論文は序章、一章から四章、結章、さらに図版、参考文献等から成る。

序章においては、論文の意図と構成について述べる。

第一章では、山田正亮の1960年の〈Work C〉シリーズから1974年の〈Work D〉シリーズ前半までの作品をとりあげ分析している。この画家の特徴的形式とされるストライプを形成する不透明色の重層構造による筆致が、絵の具の垂れを伴った物質感のある不均一なものから、色相や明暗の階調が徐々に整理されていき、最終的に、画面が筆致の起伏のない二種類の色相による対比と反復に展開していく経過を検証している。

第二章では、山田の1975年から1978年までの〈Work D〉後半の作品について分析する。画面は、矩形との比例関係を保ちながら、分割された方形による色面の反復へと変化する。その構成は、筆致の起伏のない平板な色相の対比によるものである。次第に分割線の延長上のもと思われる十字形や階段状の構成が画面に現れるようになり、色彩の循環や空間の連続性によって画面の統合が図られている。

第三章では、1980年代の〈Work E〉から1996年の〈Work F〉までの作品を分析する。この時期の作品は、筆致の起伏を積極的に活用し、色相を複雑に交錯させた無秩序な状態の部分、額縁状に囲む線分や十字形の線分によって画面上で統合しようとする構成をとっている。さらに交錯する筆致の延長上に現れる斜めのストロークが画面の緊密性を高めている。そして、その緊密な部分が面的な筆致に変化し、画面全体に拡張されるという経過をたどる。筆致の交錯による「偶然性」を、線分による構成で確定していく作業のなかで、筆致の幅が変化していくことが特徴的な展開である。

第四章では、山田と同じくストライプ形式の画家である桜井英嘉の作品と、その影響下にあった工藤礼二郎の作品の変遷を分析し、比較検証する。山田のストライプがキャンヴァスに不透明の色相を並置するの

対し、桜井は生の綿布に透明の絵の具による重ね塗りを繰り返し、浸透する発色効果を重層させることによって、色彩が画表面に浮遊している状態を作り出している。工藤は叩き刷毛を使って絵の具を重ね塗りし、画表面と基底材の物質感を対応させることによって画面を作っている。この三者を比較すると、画表面を基準にして、画面奥部に浸透する筆致と物理的表面との関係の差異によって、それぞれを位置づけることができるとしている。

結章では、筆者の1990年代初頭から2005年までの作品について、筆致の視点から分析するとともに今後の課題について考察する。再現的表現から、曲線の組み合わせによる形態、水平・垂直・斜線の組み合わせによる画面の分断と並置による構成を経て、斜線による空間錯視とそれを補正し画面全体を統合する作品に至るまでの筆致の果たす重要性について、その展開の必然性ととも自作で検証した上で、筆致の重層の過程で生まれる下層の色相とのズレと空間表現の関係を、今後の研究課題としている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

現代日本の著名な洋画家の一人である山田正亮の作品の展開を、筆致という観点から分析し、その絵画形式の中で筆致が果たしている役割を検証した事は意義深い。また、その周辺の画家と比較することで、筆致と画面の重層構造や色彩表現との関係を明確にしたところに、制作論としての本論の独自性がある。

筆致は、一般的には筆勢や筆触とも言われ、画表面上に展開する画家の筆の痕跡として解されている。そこに個々の画家の体質や造形的な嗜好が反映されることは明らかであるが、筆致を造形的な観点から分析し、制作過程に関わる絵の具の塗り重ねによる重層構造と関連付けたことは、新しい解釈の提示といえる。また、絵の具の物理的な重層構造は色彩の見え方にも大きな影響を与えることから、今後の研究課題としても期待できるものである。この論考が単なる作家論・作品論にとどまらず、絵画表現における筆致の重要性を確認し、絵画制作における筆致の適用の解釈を広げた意味は大きい。

結章において、自作の制作過程を客観的に検証するなかで、それまでの筆致に関する考察と実践的な応用事例としての著者の作品が提示されており、具体的な成果として活かされていることを確認した。

なお、審査に際して、本論文に関連する資料としての作品の展覧会を実施し、論文に必須の資料として熟覧した。

以上から、本論文は、著者ならではの実践的な視点により、油彩画制作に関して独自の考察を加えた論文として高く評価できるものである。本論文により、著者の研究目的は概ね達成したといえるが、今後は、その方面での考察を深めるとともに、制作においても、一層の精進を期待するものである。

よって、著者は博士（芸術学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。